

荻谷剛彦 著

『知的複眼思考法』誰でも持っている創造力のスイッチ』

(講談社α文庫)

とある科学館で複眼レンズを買った。わくわくしながら近くの景色を見てみたが、同じ対象が何面にも映し出されるだけで、私の求める「複眼」とは異なるものだった。

「複眼」という言葉にあこがれる。年齢を重ねるごとに、私の目は「もの」を同じようにしかとらえなくなり、感動が減ってきている。新しい「眼」が欲しい。強い願いである。

出会いは、やはり、ある。とある本屋で、今度は「複眼的思考法」というフレーズを衝動買いました。

今度は、期待通りだった。

この本には、著者の荻谷剛彦氏が教鞭を執る(執筆当時)東京大学での「物事を疑え」という授業のようすが描かれる。

著者は学生に問いかける。「物事には正解がある?」「知識があれば問題は解決する?」時に「A、B、C」という評価に

対してさえ、「?」を投げかけさせる。

「クリティカルシンキング」という流行語は、今から二十年も前、その大切さがすでに語られていた。私たちは、何をしていたのか?

もともと「二十年前? もう消費期限が切れている」と思う人がいるかも知れない。ご心配無用。この本の帯には、「全国15万人の大学生が選んだベストティーチャーの奥義」とある。

これから大学へ進もうとする皆さんにうってつけの本である。内容は敢えて書かない。ただ、私に見える世界が、この本に出会って、少し、変わった。それぐらいは紹介していいだろう。

柳田國男 著

『妖怪談義』

〔『定本柳田國男集第4巻』〕

[918 Y7-1]

『年中行事覚書』

〔『定本柳田國男集第13巻』〕

[918 Y7-13]

『蝸牛考』

(岩波文庫) [081 I1-9 138-7]

読書案内

高三のときに「民俗学を専攻してお化けの研究がしたい!」と言ったら、担任の先生に頭を冷やせと言われた。だいぶ頭は冷えたつもりだが、もしもう一度大学で学ぶとしたら迷わず民俗学を選ぶだろう。民俗学とはどんな学問かということを紹介したい。

妖怪には一つ目小僧や一本ダタラといった一つ目、一本足のものが多いが、なぜ三ではなく一なのか。河童の言い伝えは全国にあるが、水辺にいる、きゆうりが好きといった共通事項と、例えば「冬になったら山に入って山童になる」といった地域限定の設定があるのはなぜか。(『妖怪談義』)

亥の子餅や鏡餅といった餅が行事に不可欠なのはなぜか。ネブタ祭りのネブタとは何か。案山子祭とは一体何だ。時代とともに行事が消える・残る理由は何か。(『年中行事覚書』) カタツムリの呼び方は地域

によってかなり違う。マイマイ、タンマガラ、デダムシ、メンミンガラモ、メメチャブロ etc. もはや同じものを指しているとは思えない。この呼び名の違いと分布が意味するところは何か。(『蝸牛考』)

このようなことを文献調査、現地調査を通じて真剣に考えるのが民俗学である。何の役に立つのかと聞かれると困る。思えば数学もちよつとそんなところがあつて、そこに私は惹かれてしまうかもしれない。ちなみにこの三冊は図書館ではなく、ここの進路室奥の本棚で偶然見つけた。呼ばれたのかもしれない。



サンガ編集部 編著

『グーグルのマインドフルネス革命』(サンガ) [498 S24-1]

5年前大学時代のラグビー部同期がアメリカの大学院に留学していた。修士論文は何について書くのか聞いたところ、「マ

インドフルネスについて書く」との返事。その時に私は初めて「マインドフルネス」という言葉を知った。その後、年を追うごとに日本でも徐々に注目され始め、いまや「マインドフルネス」は心理学において最も注目を集める領域の一つである。この本では世界企業グループ社にてマインドフルネスの社内プログラムを企画・実践しているビル・ドウェイン氏へのインタビュー及び補足説明そして簡単なマインドフルネスの実践が紹介されている。マインドフルネスは一言でいうと「瞬間、瞬間、今という時間に気づくこと。好奇心や親切な心、思いやりの気持ちに満ちているもの」だそうで、「ストレスが軽減される」「感情のコントロールができるようになる」「思いやりの気持ちがあふく」「アイデアが湧く脳になる」といった利点がある。しかもそれが科学的に実証されているので、医療だけでなく、ビジネス分野などでも取り入れられ、多くの企業において社員に対する実践が行われている。本書は大人に向けて書かれては

いるが、様々なストレスにさらされている現代の高校生でもマインドフルネスを実践する意義は十分ある。一日十分ほどの取り組みを続けていくと効果が出てくるとされており、本書には毎朝簡単にできる実践例が紹介されているので、ぜひ本書を手にとってマインドフルネスの恩恵を受けてみてほしい。

和田 竜 著

『忍びの国』[913 W7 4]

自宅からの通勤時間が、読書タイム。一時間の電車通勤は大変かなと思っていたが、案外有意義だ。

昨年、本校図書館にリクエストして入れて頂いたのがこの一冊。忍者がどのような暮らしをし、実際にどのような忍術を使っていたのか興味津々でリクエストした。昨夏に嵐の大野くんが主演で映画化されたが、映画は観ていない。実は4年前の読書案内で紹介したのは、同じ著者の『のぼうの城』[913 W7 1]。

読書案内

その後、ベストセラーとなった『村上海賊の娘』[913 W7 3-2]』

を経て、今作に至るのだが、和田竜の歴史小説は史料調査が緻密でリアリティがある。紹介しておきながら何だが、今作は『村上海賊の娘』と比べるとスケールは少し小さい気がするが、主人公の伊賀流忍者、無門の忍びの腕の超絶さは痛快。来年度から三重大学大学院に忍者・忍術学専攻が新設される。進学希望者は必読か。

最近、書店で話題の本コーナーに置いてある磯田道史著『日本史の内幕』を、トレーニング好きのバイブル的雑誌『Tanzan』と一緒に買った。店員

さんはこの2冊の異種格闘技感に混乱したかもしれない。磯田さんは古文書を読解でき、その著者ならではの、新発見が散りばめられている。歴史は権力者によって美化される、というところがよく分かる。ただ今回紹介されている古文書も、真偽のほどは分からないのも事実だが、歴史の新たな見方を教えてくれる。

また、語源やルーツを探るのが好きな人には、『大阪「地理・地名・地図」の謎』[291 T30 1]もおすすめ。「十三」という地名のルーツ、「じゅうそう」という読み方のルーツも知る事が出来る。

鹿島 茂 著

『レ・ミゼラブル』百六景』
(文春文庫) [953 K5 1]

読書習慣ゼロの男が面白く読めた一冊。普段目にするのは楽譜と漫画。漫画すら最近では読まない始末。それでも読めてしまいうこの本の威力は絶大である。文豪ユゴーの原作に挑もうなど百万年早かった。とりあえず長い。長すぎる。文庫で二千ページを軽く超え、主人公のジャン・バルジャンが登場するまでに百ページを要する。読めど読めどオープニングのシーンに辿り着かないもどかしさに、二〇一二年公開のミュージカル映画しか知らない私の体力は消耗するばかり。バルジャンが登場した時点でほぼグロッキー状態。

ついに四巻中の一巻も読破できぬまま挫折。あまりに浅薄な考えで、それは素人がトレーニングもなしにフルマラソンに挑むようなものだった。しかし、五里霧中の私に一筋の希望の光が差し込んだ。何やら原作を読まざとも全貌が把握できる夢のような本があるらしい。作品の象徴的な各場面の挿絵と原作を抜粋したものに、当時のフランス社会や歴史的な要因など微に入り細を穿った解説が加えられているので、小説を楽しみながら文学を通して歴史的な考察に触れることができ、無知な私でも時間を忘れて読むことができ。まさに「レ・ミゼラブル」の解体新書と言っても過言ではないだろう。「レ・ミゼラブル」好きはもちろん、原作を読んだ(または映画を観た)がなかなか理解するのに苦労した人、世界史が好きの人、そして私のように読書習慣がない人にも是非。

ただし、最終的には原作に挑戦したいという人が現れるのを期待している。

132期 国語総合「読書ノススメ」

『植物図鑑』有川浩 [913 A34 7]

「お嬢さん、よかったら俺を拾ってくれませんか？ 咬みません。糕のできたよい子です。」——あらやだ。けつこういい男」

——ある日、道ばたで落ちていた彼、イツキ。さやかが彼から聞いたのはそれだけ。でも、それで充分だった。二人の共同生活は次第にかけがえない日々となっていく——。

花を咲かせるように、この恋を育てよう。『阪急電車』『図書館戦争』の有川浩、最新にして最高のラブストーリー！番外編に加え、イツキの特製「道草レシピ」も掲載！

『ジュラシック・パーク』

マイクル・クライトン

映画『ジュラシック・パーク』を見たことがある人は多いと思うが、小説を読んだ人は少ないのではないだろうか。映画はただ恐竜が暴れまわるだけのように描かれているが、小説にはカオス理論によるパークの崩壊の予測や、DNAを自分勝手に扱うことを批判する生命倫理の思想など、深い話が多い。また、二十年も前の作品であるのにタッチスクリーンが登場しているのも面白い。全体的に深く、読みこたえがあるので、ぜひ読んでほしい。

『か』『く』『し』『こ』『と』『住野よる』 [913 S100 4]

ザ・青春と言えるこの本は、読み進める度に少し恥ずかしくなる。それは自分にも似たところがあつたり、実際に経験したことがあるという裏返しなのだと思う。私はこの本を読むことでHPを削ったが、どうかそれでも読んでほしい。今だからこそ感じられることがあるはず。

清々しくて、凜としていて、時々きついても感じられる高校生が繰り広げる会話と考えることに、きつと読む手が止まらない。独特な住野よるワールドを体験してください。

『博士の愛した数式』小川洋子 [913 029 4]

「君はルートだよ。どんな数字でも嫌がらず自分の中にかくまってやる、実に寛大な記号、ルートだ。」博士が初めてルートに会ったときの言葉だ。たくさんある博士の数学用語を用いた難しい名言の中で、最も簡単に心に響いた言葉だ。博士の子供愛をルートはからだ全身で受け取り、博士と私とルート三人の生活は、幸せと欲びと驚きに満ちたものになる。彼らの何気ない日々から、博士の心の大きさ、優しさや、記憶が八〇分しかもたない悲しさなどを感じることができ、心が穏やかになる素敵の一冊だ。

『風が強く吹いている』三浦しをん [913 M80 2]

陸上部、長距離は必ず呼んでおくべき名作。

ただ箱根駅伝の説明の小説ではなく、テレビでは映されない、現実味溢れる人間模様までも映し出す。よくわからないと、正月に見ていなくても箱根駅伝の裏側に潜むドラマを、選手の目線で体感できる、ほかにはない一冊。来年の箱根駅伝を確実に楽しめる。走る意味という誰も知らない答えに一歩近づける。

仲間がいるスポーツで避けることのできない、「チーム内での実力差」という問題。もちろんこの本でも例外ではない。しかし、メンバーが箱根駅伝の区間と同じ十人しかいないところが重要である。補欠は居ない。仲間のために自分が走るしかない。

まず、夏休みの課題として「ぜひこの本を人にも読んでほしい」という一冊を各自が選び、推薦文を書いてもらいました。なるべくみんなが手に入れやすい本が理想ですので、図書館の所蔵本が、新潮社から配布された「高校生に読んでほしい50冊」の中から選ぶことにします。ワードで作成した推薦文は各クラスでファイナルに綴じられ、クラスメイトがどのような本を選んだのかがわかります。また、同じものが一年生の教室前にも掲示され、他のクラスの友人の推薦文を自由に眺めることもできます。最後に、掲示されたものの中から一つ、読書熱を一番かきたてられる推薦文を選び、推薦者へのメッセージを送りました。

(一年国語科)